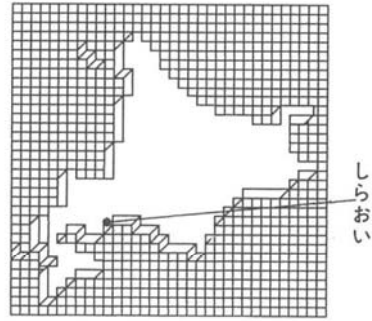


連載



◇白老町の地理条件

白老町は胆振支庁管内のほぼ中央、東は別々川をはさんで苫小牧市に、西は伏古別川を境に登別市に接する太平洋岸に位置し、面積四一五・五平方メートルの町域を有する中堅町村である。町の西側から北東にかけてはオロフレ山、白老岳、樽前山などの山岳が連なり二、三〇〇畝に及び国有林となつて支笏洞爺国立公園の一部をなしている。農耕地は二、五六七畝と全体の約六％に過ぎず、連山から太平洋

あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

No.11

白老町の事例

白老牛の復活にかける

に流れるウヨロ川、白老川、マクンベツ川等の河川に沿つて農耕地がいわゆる串の歯状に形成されているが、海岸部を走る国道以外に谷と谷をつなぐ農道が整備されていない。このことは後に述べる農地の流動化に伴う飛び地の作業効率に大きな影響を与えるものとなっている。

白老というアイヌコタンを思い浮かべる人が多いと思うが、白老アイヌの歴史は今の熊坂エニシから十一代さかのぼつたイペニツクルまで辿ることができるといふ。

江戸末期から明治初期に至る倭

人との壮絶な抗争の歴史を経て、明治中期に政府より一戸につき三畝の土地を配分されてトウカンベツ地区を中心に数十戸に農耕を主体とする定住策がとられたが、農地に適さない土地条件だったり、倭人にだまされたりで農家として定住したアイヌは少なかった。現在は観光資源としてポロトコタン及び国道沿いの民芸店にその面影を残すに過ぎない。

◇産業構造

白老は大昭和製紙の工場立地と

表1 平成二年国勢調査

区分	就業人数(人)	構成比(%)
第一次産業	901	8.8
第二次産業	4,048	39.5
第三次産業	5,039	51.7

旭化成をはじめとする臨海工業団地への工場進出によつて北海道の地方都市には珍しく二次産業型の町である。一方、一次産業も肉用和牛を主体とした農業、虎杖浜を中心とした、すけとう、さけを主体とする漁業、広大な国有林を背景にした林業があり、三次産業資源も町内至る所から湧出する温泉、ポロトコタン、そしてなんと言つても支笏洞爺国立公園の一部を形成し、倶多楽湖等ほとんど人手の

入っていない自然を有している。
このように恵まれた条件を備えているにもかかわらず、町として今一活性に乏しいのは言ってみれば何でも有るために、かえって焦点がぼけて何にも集中できなかったと為と言えろ。

◇気象・土壌条件と

土地利用

気候は比較的温暖かつ、海岸沿線特有の気候のため年間の平均温度はおおむね七〇程度で、降雪量も少ないが、農耕期から夏期にか



▲白老牛（黒毛和種）

けて海霧の発生、更に降雨量も多く、このため作付け作物も制限を受ける。

農用地面積は全町でおよそ二、五六七畝、その内九五%以上が牧草地と採草放牧地となっている。土壌は有珠系粗粒火山灰の厚層に覆われた土質で、耕種作物を中心とする農業生産から見ると低位生産地帯とされてきた。白老町の基幹作物は、肉用牛（和牛繁殖が主体）で、これに複合作目として酪農、椎茸が導入されてきた。

◇白老農業の歴史

白老町の農業は、仙台藩が本町に元陣屋を構築し、馬産奨励に端を発している。

大正期には馬産地として発展し、大正九年には白老家畜市場が開設され戦前まで隆盛を極めた。戦後は時代の交遷とともに、農耕と運搬が機械化される中で馬産は衰退し昭和三〇年代半ばから市場も馬から牛へと移行していった。

農作物は夏場の海霧の発生による日照不足と火山灰土壌のため農

作物専業農家は少なく、〇〇〇戸を超える農家の大半が兼業農家であった。米、ばれいしょ、とうもろこし、大小豆、そばなどが作付されたが、特にだいにんは高品質で戦前まで成鉱地帯や旭川の第七師団に大量に納入された。

一方、白老農業の歴史は災害との戦いの歴史とも言える。明治十五年、十勝に端を発したハツタの害は遠く風に乗って白老の農作物を食い尽くし、農民は飢餓にあえいだといった記録が残っている。また明治四二年の樽前山の火噴による降灰は開拓事業に大きなダメージを与えた。

◇肉牛の導入と発展

戦前盛んであった馬産に変わる兼業の一品目として始まった肉牛の導入は、昭和一九年北海道で初めて黒毛和種「島根和牛」の導入を契機として道と町が奨励した子返しによる貸付制度によって普及の基礎が据えられた。

その後、昭和四七年には肉用牛生産振興計画を策定し各種奨励施

表2 平成6年農業生産

品目	金額 (百万円)
野菜	16
花卉	15
肉用牛	407
乳牛	13
豚	23
鶏	2,200
馬その他	513
計	3,183

策によつて三、〇〇〇頭の普及を
めざした。またホクレンの家畜市
場が昭和四九年開設され、価格形
成の場としての機能を發揮し始め
たことも道内における肉牛生産の
中心地としての自覚を促し、増産
機運が高まった。昭和五〇年には
全国和牛登録協会から実績を認め
られ道内で初めて「白老牛」とし
てブランド認定を受けるまでにな
つた。

しかし、昭和五三年から農用地
開発公団事業によつて取り組んだ
畜産基地建設事業により機械施設
等の整備拡充を行い、生産基盤の
整備と経営規模の拡大を進めたが、
肉牛価格の変動と飼料、素牛等生
産諸資材の高騰といった外的要因
と肉牛経営、技術管理対策といつ

た内的要因が相まつて、一方で多
額の借金を抱え離農が進むとい
うマイナス面も見られた。

また、繁殖方法も旧来の牧き牛
体系に依存して、血統重視の市場
価格に対応できず新興の和牛産地
に後れをとるようになり、生産も
農家の高齢化に伴い低迷するよう
になった。

最近になつて受精卵移植等の最
新の繁殖技術を用いた品種改良が
導入され、急速に遅れを取り戻し
つつある。

現在の農業生産は、表2を見て
も分かる通り、白老の農業生産
の大半を占めるのは企業養鶏8戸
と社台ファーム他の少数の軽種馬
生産で、いわゆる個人農家では開
拓の時代を支えた水田、畑作は消
滅し、戦後の酪農経営も現在かろ
うじて一戸が生産を継続している
状態で、ほとんど肉牛に特化され
ている。

◇農地の流動化

一九九〇年以降六〇〜七〇分の
農地が売買による所有権移転の形

◀ホルスタインへの受精卵移植で
生まれた黒毛和種の仔牛



で流動化していったが、この三年は
一〇分の移転が急速に減少してい
る。これは借り手の減少と考えら
れる。高齢化に伴い農地を手放し
て離農を希望する農家は増加傾向
にあるのに、一見逆の現象のよう
に感じられるが肉牛経営の先行き
不安から規模拡大について様子を
見る農家が多い。しかしこの事は
農地の大半が牧草、放牧地である
ことから休耕イコール農地の荒廃
化に直結するという問題を含んで
いる。一九九五年の耕作放棄地が

一〇・一九分にも達していること
から、この対策も早急に検討を要
する事項と言える。

◇白老青年部八人衆

八方ふさがりに感じられる白老
農業にあつて、元気の良い青年部
八人衆の存在が、白老農業の今後
を決める鍵になると思われる。

彼らは、有名無実化しつつあつた
「白老牛」の復権に取り組むとい
う強い信念があり、品種改良のた
めの最新技術の導入、一貫肥育に
よる付加価値の増加と素牛能力の
確認、販売戦略の検討といった肉
牛振興のための様々な分野に意欲
的に取り組もうとしている。

ただ、すべてが家督を相続して
実権を持つていっているわけではなく、
また、取り組みに当たつてアイテ
アを具体化するための組織を持つ
ていない。彼らの頭の中は、「白老
牛」でいっぱいだが肉牛の今後を
考えると、野菜等を取り入れた複
合による安定化や、海産物、林産
物を組み合わせた販売戦略も検討
する必要がある。

しかし「俺たちはこれをやりた
い」というものを青年部として
まとめ切れたら、それは大きな力
となつて農業団体や行政を動かし、
ひいては町の全体的な元気の元に
なるのではないかと期待している。

◇活用すべき有利条件

(1) 交通と物流のアクセス
海岸線に平行して国道二六号線
道央自動車道、JR室蘭本線が走
り札幌、苫小牧、室蘭という都市



▲白老和牛レストラン

圏からのロケーションの良さは今
後の白老経済の発展にとつて非常
に有利な条件と言える。また都府
県への海上輸送は苫小牧、室蘭港
へのロケーションも良く、航空輸
送では千歳まで四〇分以内といふ
有利な条件にある。本年開通予定
の道々白老大滝線の開通に伴い近
郊都市からの流入は更に増え、都
市との交流事業の契機となること
が期待される。

(2) 土壌気候条件

冬季間の日照があり雪が少ない
事、そして夏期間の気温が上がり
ないことはシクラメン等花ぎの栽
培にとつてもつとも必要な条件と
言える。また、温泉熱の利用によ
る温空栽培も町内至る所に湧出す
る温泉の効率活用として検討され
るべきである。

(3) 住環境

昨年実施した全農家アンケート
の結果を見ると、離農を決議して
いる八戸の内現在地でそのまま暮
らすか六戸、町内の市街地に移る
が二戸で、町外に出たいという農
家がいない。

この事は白老が高齢者にとつて

◀しいたけ種菌打ち



も住み易い町であることを示して
いる。行政また農業団体にとつて
このことは誇りにして良いことだ
が、それに足る高齢農家対策に真
剣に取り組む必要が有ろう。

◇今後の展望

和牛の素牛生産は、北海道、東
北、九州等の農業地帯に移りつつ
ある。その中でも地価の安さや農
地の賦存量から見て、北海道の地
位が高まっていくものと予測され
る。特に府県においては、中山間

の村の高齢農家が素牛生産の担い
手である事からも、今後北海道へ
の期待は高まってくるであろう。
しかし牛肉の消費は農畜産物の輸
入自由化に伴い、輸入牛のシェア
ーは既に六割を超えている。

〇一五七の事件もあつて国産
牛肉の市況は回復基調にあるが、
一方で遺伝資源の国外流出により、
海外産の和牛が逆に日本市場に流
れ込んでくる事態も考えられる。
今後の展望は必ずしも楽観できな
い。この時期に白老農業の将来展
望を考え、安定と発展の布石を打
つておく必要が痛感される。

レポーター

専任研究員 斉藤 勝雄



▶ポロトコタンのキャンプログハウス